張文環「閹雞」再考―検閲と再編の視点から―

張文薫

（台湾大学台湾文学研究所所長）

台湾人作家・張文環（1909～1978）の小説「閹雞」（1942 年）が日本統治期台湾文学の代表的作品であることはよく知られている。同作品が当時の代表的作品とされるのは、その度重なる改編の成功に由来する。「閹雞」が最初に舞台化されたのは発表の翌年 1943 年の事で、「厚生演劇研究会」により新劇として改編上演され、大成功を収めた。それ以降、戦後も含めて数度にわたり映画や舞台劇に改編されている。

しかし、台湾における日本語文学の収穫期といわれた 1940 年代には、張文環「閹雞」以外にも、呂赫若や龍瑛宗らによる郷土色豊かで優れた小説が数多く発表されている。そうした状況において、「閹雞」が当時の代表的作品とされる所以は何であろうか。

本研究は、「閹雞」の改訂用手稿（年代不詳、張文環作）、検閲用脚本（1943 年、林博秋作）、再編作「月印」（1984 年、郭松棻作）という三つの新資料を用い、張文環「閹雞」における空間性と個人的な自覚を分析し、小説の芸術性と文学史的価値を再考しようとするものである。